『教行信証』における称名（その4）

石原斌夫

一、本願名号への指向

今回は、本願力を中心とした思索に検討を加えて見たい。先づ第六自釈文（他力釈）に「他力と言は、如来の本願力也。」と言つている。本願力の出典は『無量寿経』で、次いで『易行品』『浄土論』『論註』に見られる。善導は願力と言つている。本願力は『論註』に「本、法蔵菩薩の四十八願と、今日、阿弥陀如来の自在神力とに由る。」と言つている。これは、本願力を智慧力と智慧の方向を与える本願の二つに分析している。衆生をして称名往生せしめると言う仏智のはたらきが本願力である。

第六自釈文は、真実行としての称名の背景をなす本願の心が「衆生の心」に由るものではなく、「如来の心」に由るものであることを強調している。従つて本願力は「如来の心」の一つの在り方である。本願力は「衆生の心」で無いと言う意味において他力と言うのであるから、称名における本願力の示現と言うことを考える場合、衆生の意識面において本願力を把えることは、決して出来ないと言う論理が成り立つ。それは、衆生の意識的な心の介入の余地を、絶対に拒否している存在でなければならない。第三自釈文の立場にもどつて言えば、現に称名している「衆生の心」において、その名号を中心として聞名と称名を促す心の働きを見る。その聞名相伴の称名が、衆生の心情的自然に従つていると言う意味において衆生の恣意を超越した存在である。而も、それが本願文と本願成就文に示す心相に叶つている。そこに、超越的存在を感じ、それが本願力であると判断するに至る。而も、その本願力は名号の形で衆生の前に示される。

そこに、名号は本願力そのものであると言う、第三自釈文の論理が成り立つている。超越的な本願力を衆生が意識面において把え得る唯一の形が、名号である。ここに本願名号観の萌しを見ることが出来る。

本願名号観の萌しと言うひかえた言い方をするのは、親鸞には世親の影響を受けた光明名号観があつて、それを『行巻』

の巻頭に出している。これに対し、竜樹に端を発し源空に及ぶ本願名号観は、巻末に至ってその姿を顕わしているからである。勿論、この二つの名号観の源泉は『無量寿経』であって、諸師において相承思索されて来たものである。

二、本願一乗海

本願力に対する思索の第二は、第八自釈文（一乗海釈）である。第八自釈文は一乗釈・海喩釈・教四十八対・桟十一対・二十八喩釈の五釈から成っている。その中で、主になるのは一乗釈と海喩釈である。

一乗釈は、誓願一乗海と言う言葉が端的に示しているように、本願力即ち衆生に許された唯一の成仏への可能な道を開く「如来の心」を一乗の言葉で現わしている。これは天台の一乗思想の影響が考えられるが、親鸞は『涅槃経』に依って示している。本願力の本質を示したものである。

親鸞において一乗思想に本願力が重合したのは、『易行品』の「信方便の易行」が「水道の乗船」に喩えられていることに起因すると思われる。一乗釈は、本願力が「大悲の願船」と言う、乗本願力の心情を持つ船喩と関わりがある。

次に海喩釈は、本願力の仏智としての機能に関わる譬喩である。「雑修雑善の川水を転じ」「無明の海水を転じ」て、本願の「大宝海水」とする仏智の転成のはたらきを、海の深さと広さに喩えている。これは『無量寿経』の「如来智慧海」が発端と思われるが、『浄土論』の「願生偈」の「功徳大宝海」の一句の強い影響が考えられる。一乗釈が乗本願力の「乗」の心情の系譜であるのに対し、海喩は本願海への「流入」の心情の系譜である。いづれも帰命の心相を伴った、本願力の譬喩的表現である。

この「乗」と「流入」の心情を伴った本願一乗海は、帰命の対象であると言う意味において超越的存在である。而も、帰命の心相を伴うことによって「衆生の心」に対し、直接に仏智としての働きを現わして来る。他力と言われる所以である。

親鸞は更に二十八喩を追加している。これは、智慧の機能を二十八通りの側面から眺めたものである。智慧機能を海喩だけで示すことは、観念的な固定化に堕り易い。それを避ける目的で多面的表現を示したと思われる。とにかく、第七自釈文は本願力を本願一乗海として衆生の心情に沿い易い形で、而もその機能を適格に示す目的を果している。

本願力が「本願の心」の散文的表現であるのに対して、本願海は詩情性の強い表現であり、本願相応を心情的にして一層容易にしている。

三、内因と外縁への思索

『行巻』の配列順序としては、前後した取上げになるが、第六自釈文で述べている内因と外縁に乗本願力の心相を対比し

て、いささかの詮索を述べておく。

先の第六自釈文で「真実信の業識、即是内因とす。光明名の父母、即是外縁とす。内外の因縁和合して、報土の真身を得証す。」と言う文がある。内容は、名号が外縁、信心が内因で、両者の条件がそろつて衆生の往生成仏は可能となると言う意味である。この中、名号は「能生の因」であるから、本願力が衆生に示現出来る唯一の手段である。と言うことは、衆生にとつて名号は本願力そのものと考えてよい。而も、衆生の往生成仏はこの本願力に全面的に依存していて、衆生はこの本願力に乗ずるだけである。然し、それ程に衆生にとつて決定的存在である本願力は、正因ではなくて外縁であると言われている。衆生の信心は、その本願力に乗ずることだけであるのにかかわらず、内因とか正因とか言われている。

この理由は次のように考えられる。本願力を外縁とした信心、これを内因とする考え方は、衆生の行法の実践上の立場に由来している。即ち、衆生の往生成仏は、本願力に負うことは勿論であるが、衆生に対し本願力が効力を発揮出来るのは、衆生がその本願力に乗ずるか否かにかかつている。衆生がその本願力に乗じなければ、その本願力は衆生にとつて無縁な存在である。従つて、衆生にとつて本願力に乗ずることが、重要な唯一の実践上の課題である。本来的に存在している本願力を、衆生にとつて有縁の存在たらしめるものは、衆生がその本願力に乗ずること以外には考えられない。そこに、衆生に強く乗本願力を要請する立場が出て来る。この本願力に乗ずることを強く要請する立場が、「乗ずる心」を正因であると言わしめている。

本願力に乗ずるとは、聞名相伴の称名をすることであり、信心求念をすることである。願力に乗ずることは信心を伴つた称名をすることであるから、信心こそ正因であると言う立場が出て来る。又、その信心は名号を以て語りかけて来る本願力によつて促がされたものである。と言うことにもなる。そこに名号・本願力は、促す力としての外縁であり、信心は内因であると言う立場が出て来る。名号は本願力そのものであり、それに乗ずることが衆生にとつて必要不可欠な往生の正因である。本願力に乗ずるとは、具体的には聞名相伴の称名をすることである。その場合、名号従つて本願力は、重要な唯一の外縁として衆生に迫ることになる。本願力は衆生往生に決定的な役割を負つていて、これを正因とする立場も考えられるが、衆生がその本願力に乗ずるか否か、と言う一点を重視する実践上の要請が、名号・本願力を外縁とし、乗本願力の心相、即ち信心を正因とする立場を成立させている。

名号は本願力の外縁としての一面である。『行巻』はそれを主張した。又、本願力には内因としての信心の半面もある。それを主張しているのが『信巻』である。